

10. 怪談の名人^{かいだん めいじん}

普通の人であれば落語と聞くと楽しい話、愉快的話と思うだろう。しかし、落語には滑稽噺いわゆる面白い話だけでなく、人情噺(人の気持ちや他人への思いやりについての物語)とか怪談噺(怖い物語)といった噺とかもあることを皆さんはご存じだろうか。

落語の始まりは江戸時代のはじめ頃とされていて、街角や小さな部屋で人々を集めて、面白おかしい噺を聞かせたところから始まった。落語を話す人も、はじめは落語を話すことを



仕事としていたわけではなく、お坊さんや武士などが本業であった。

噺の最後に落ち(さげとも言われて、噺の面白い結末など)がくると

ころから、「落とし噺」それが短くなって、落語となった。江戸の

中頃をすぎると寄席と呼ばれる落語を観客に見せる場所が作られ、

職業落語家が現れるようになる。現在の落語は高座と呼ばれる舞台

に座って一人で、扇子と手拭いだけを使って噺をする形式が多いが、

この頃の落語は鳴り物(太鼓や三味線)を鳴らしたり人形を使ったりした落語が人気を集めていたようだ。また、面白い噺だけだった落語に人情噺や怪談噺が取り入れられるようになり、一般大衆の娯楽として広がった。

怪談噺の名人と呼ばれた人が、江戸時代末期から明治時代にかけて活躍した初代三遊亭圓朝である。圓朝の父親も落語家であり、父親の影響もあって7歳の時には寄席の高座で落語を披露したという。圓朝は次第にその実力を現すようになるが、ある時、師匠の圓生に圓朝が演じようとしていた演目を先に演じられてしまい、演じる演目がなくなってしまうという出来事が起きた。なぜ圓生が圓朝の演目を演じたかは定かでないが、圓朝はこれをきっかけに、自作の落語、つまり新作落語を創作するようになる。

圓朝が創作した落語には「牡丹灯籠」などの怪談噺や「文七元結」などの人情噺があるが、それに加え圓朝は外国のものを翻案して落語を作ったりもした。有名な作品の中に「死神」という作品があるが、これはグリム童話の「死神の名付け親」または歌劇「クリスピーノと死神」をもとにしていると考えられている。

このように圓朝^{えんちょう}は、落語^{らくご}の世界^{せかい}においては別格^{べっかく}と言われるくらい^いの落語家^{らくごか}であった。しかし、落語^{らくご}の世界^{せかい}では弟子^{でし}が名前^{なまえ}を代々^{だいだいつ}継いでいくのが普通^{ふつう}のはずなのに、圓朝^{えんちょう}の名前^{なまえ}は残念^{ざんねん}ながら継^つがれていない。今後^{こんご}、圓朝^{えんちょう}という名前^{なまえ}を復活^{ふっかつ}する落語家^{らくごか}が出てくるのだろうか。

単語リスト：

落語（らくご）	Hài độc thoại	三味線（しゃみせん）	Đàn Shamisen
愉快（ゆかい）	Hài hước	大衆（たいしゅう）	Đại chúng
街角（まちかど）	Góc đường	師匠（ししょう）	Bậc thầy, sư phụ
扇子（せんす）	Quạt giấy	披露（ひろう）	Công khai, phô diễn
寄席（よせ）	Một loại sân khấu kịch nói của Nhật Bản	演目（えんもく）	Danh sách tiết mục
高座（こうざ）	Bục (chỗ đc kê cao lên)	創作（そうさく）	Sáng tạo
太鼓（たいこ）	Cái trống	復活（ふっかつ）	Hồi sinh, phục hồi